

戦だ。金吾は城から届いた紙を握りしめ、小さく息を吐いた。皆本家は大きな家であるといえども、大名に仕える一介の武士にすぎない。その国が戦を始めるとなれば、戦力として徴兵される。そのことに不満を持っているわけではない。

昔、あの学び舎で、級友に甘いと言われたその本質は変わらないのか、金吾にとって戦とは無意味なものにしか感じなかった。もちろん自分の領地を守ることは民を守ることにつながる。しかし度重なる戦を守るべき民自身を疲弊させる結果にしかない。

しかし、金吾が皆本家現当主であったとしても、上が戦うと決めひとたび命が下れば一介の家臣にすぎぬ金吾に出来ることなどなかった。

「用意を」

は、と短い返事が返ってきた事を確認し再び手元の紙に目を落とす。大きな戦だ。最近の状況を見る限りあまり有利とはいえないだろう。またにも戦えば城がおちるのも時間の問題であると思われた。

戦うべき相手は、いつの日か級友が勤めたと話に聞いていた城だった。忍術学園を卒業し、あつてはほしくないと願った未来だった。

＊

堅苦しい正装に身を包み城へ登城すれば、もう既に多くの家臣たちがいた。戦がなければ会うことも少ない者達に、顔も覚えただけ無駄だと情もわかぬようにとだけ務める。

戦うことは好きだった。しかし戦となれば話は別だ。何の関

係もない民が死ぬことはない。民を守るという名目で戦えど、その後の焼け野原をみればなんとも後味の悪いものばかりが残る。あの焼けた田畑の光景は、なんど見ても見慣れることはない。

幾人ともすれ違い目的の広間に向かい歩いていた時、一瞬、誰かとすれ違った。ふと鼻をついた懐かしい匂いに振り返った時には相手の後ろ姿しか見えず小さく舌打ちする。

それは間違いなく、忍術学園にいたころずっとそばにあった彼のものだった。

しかしこの場所にいるはずのない存在に、自分の願望が生み出した幻影だと、他人の空似であるとかぶりをふった。あるはずがないのだ。優秀な彼が就職した城は、この城ではなく、今から戦うべき相手だった。

金吾のもとに、学生時代に付き合っていた黒木庄左エ門から文が最後に届いたのはいつだったか。卒業を控え、就職が決まり、皆各々の道を行く時には自然と距離を作っていた。将来も共にと誓い合った幼いころとは違い、お互いいつか別れがくるものであると自覚していた。

二人が思いあつていたとしても、時代と環境がそれを継続させるにはあまりにも厳しかった。あの箱庭には、永遠というものも存在しない。ならば敵対せぬうちにと、先に別れを切り出したのは金吾の方だった。庄左エ門はそう、小さく言っただけで、激昂することも、ましてや引きとめることもしなかった。

驚くほどあっさりとした別れに、は組全員から心配されたことを今でも覚えている。

卒業後も何度か、庄左エ門から文が来た。おそろおそろそれを開けた金吾の心配は杞憂に終わり、そこに書かれていたことは今年の作物の状態でとか、弟が忍術学園に入学して、つきそいで学園に一度戻ったこととか、土井先生の胃の調子だとか、とりとめのないことばかりだった。あのころの想いなんて書かれてはいなかった、あえて書かなかったのかもしれない。

返事をしなかったのは金吾の方だ。返事をすれば別れた時の覚悟がゆらぎ、あつてしまえばそれに耐えられる気がしなかった。だから、全て、手紙は黒塗りの桐箱の中にしまった。学生時代の思い出とともに、自分の心にも蓋をした。

今、彼がどこで生きているのかも知らない。たまに会う事のあるは組の面々から噂に聞く程度だ。そのうち、手紙は来なくなつた。

広間のようになっているそこに腰をおろし、これからの話に備える。見れば今迄の戦に比べ、勝利を、手柄をと意気込んでいるものは明らかに少ない。戦力差は歴然であり、あまり勝利を望める現状をだれもが理解していた。しかし逃げる事は許されない。どれ程不利な戦であつても、死ぬと分かっていたとしても、戦う事しか自分たちに与えられた選択肢はない。

ざわりとしていた広間に静寂が広まる。当主が来たのかとうつむいていた顔を上げれば、視界に飛び込んできたのは鮮やかな黒髪。年を重ねるごとに下級生だった頃の委員会の先輩に似てきた笑顔。何も変わらない、その人物に息をのむ。城主の横でにこやかにたたずむ彼は、やはり庄左エ門でしかなかった。

庄左エ門の口から淡々と語られる策に、重臣達は心酔したように頷いている。その様子を見て、そのあまりに依存した姿は金吾の目には滑稽にしか映らなかった。

卑怯な手だった。武士として育てられた金吾にはそう感じる。しかし忍術学園で学んだ記憶の中ではその策しかないことも理解した。

「皆本殿」

「、はい」

気がつけばそれぞれの配属が終わり、声をかけられた金吾は慌てて立ち上がった。何度か戦場で共に戦ったことのあるその男は、金吾が皆本家当主になる前からの知り合いだった。

「此度の戦、皆本殿は…」

「ああ、私は奇襲部隊の方に」

「そのことですが、私はてつきり本陣の方に行かれるとばかり」不思議そうに小首を傾げる彼は、金吾の今までの功績を知っているが故なのだろう。金吾自身、本陣の方に行けると思っていたが、それは思い上がりであつたと自身を律した所だった。

策を成功させる為にはどの役も必要であり、優劣はない。それを学園で学んだ金吾はあつさりと自分の役割を受け止めていたが、周りはそういった考えではないらしかった。功績をあげたものを優遇する社会であれば仕方がないのかもしれない。

「黒木殿も、何を考えておられるのか…」

「皆本殿では本陣に出て頂くには役不足だからですよ」

背後から聞こえた声に空気が凍った。予想通りにこやかに笑う庄左エ門がそこにいて、その表情を崩さないまま毒を吐く。

「足手まといは必要ありません故。それは皆本殿ご自身が

